

なたの九腸を寸断してしましますそれからあなた
は三度の食事以外に何物をもめし上つてはいけま
せんもし何か上ればそれは皆虫がたべてしまいま
すそしてドシ〜と大きくなります」

この手紙を見ました金藏は翌朝はやく御醫者様の
云ふとほりテク〜とあるいて家を出ました。

毎日〜ゴロ〜となまけくせのついでに金
藏にはテク〜と徒歩するのが物らく覺えられま
したのでその日は二三里で旅館にとまつてしま
しました。翌日目がさめますと大層気分がよい様
ですから又元氣をだしてテク〜あるき出しました
その日は始めの日よりもすうつとたくさんあるけ
ました。偕その翌日にはもう病氣の様な氣色は少
しも御座いません。かように致しましてこの御醫
者様の所に金藏が参りました時にはもうどこも悪
い心地がしませんでしたのでたゞあつく御禮をの
べて又あるいて歸宅致しました。
金藏は運動が何より身体の健康に益があると云ふ

とを悟り又間食がなによりのだとくであるといふ
を感じました。その後金藏は至極壯健に長命い
たしましたとさ。めでたし〜

太郎と犬

硯山人

或處に太郎と云ふ子供がありました。或る冬の土
曜日、今しも學校から歸つて來た所で、お椽側へ
本の包みを投げ出して「お母様只今！」もそこ
〜にすませて何時もなら何か頂戴！と云ふ所を
今日は何うしたのか何とも云はないで裏庭の物置
へと入り込みました。何をするかと思つたら、
太郎は頓がて物置の柵から金鎚やら、釘やらを取
り出し、そして板片を四五枚集めて、何か頻りに
打ちつけて居りました。あまりトン〜ガタ〜
ゴリ〜と喧ましく音をさせたのでお母様はお氣
付になりました。

母「太郎やお前は何をなさるのでですか、大層喧まじいネ」と仰いました。

太郎「今ね、母様、面白いの構へて居るのです。」

ソレハ「面白いの！」

母「ソレは結構だね、何が出来すか」

太郎「アノネ母様、僕は今箱車を構へて居るので、そして明日は此車をジョンに引かせて山へ皆と石を取りに行くんです。面白いでせう」

ジョンと云ふのは太郎の大好きな小さいむく犬の事です。すると母様は

母「それはいけませんネ、そんな可哀そうな事をしてはいけません、ジョンはまだ小さい子供犬ですから、そんな重い物を引かせては可哀そうです。それよりも其箱をお前が引いてお行でなさい」
小犬には可哀そうです」

と仰いましたが、太郎はまだ不服です。

太郎「私いやです。重いんですもの」

母様「ソレ御覽、太郎にも重い位のを小犬のジ

ョンに引かせるとはひどいではないか」

太郎「それでもジョンは犬ですもの痛かありませんよ」など、耗らず口をきながらガタ／＼叩いて居ました。

頓がて夕方になりましたので母様は

「太郎やジョンにお飯をお遣なさい。お腹が飢つたらうから」と仰いました。

「ハイ只今」と云つたきり、一切夢中でトン／＼叩いて居ました。

日の暮々になつて漸く箱が出来上りました。

「さあ明日は之をジョンに引かせて遣らう、面白いなわ」と太郎は獨り言云ひながら、あまり疲れたので暫く茫然して居ますと、又母様の聲で

「太郎や、ジョンに御飯をお遣りかへ」と云ふ御尋ねです。太郎は今迄すっかり忘れて居たのです

「わ、母様、忘れしました。いゝでせう今片付けてからでも」

母様「忘れたんですか、可哀そうですよ、片付ける

のを後にして早くお遣いなさい。」
と仰いました。太郎は平氣です。

「ナニ犬だもの構ふものか」とつぶやきながら向ふの方に鼻を鳴らして居る寒さうなジョンの鳴き聲を聞きながら自分勝手な仕事に夢中になつて居ました。あまりジョンの鳴き聲が可哀そうなので遂々母様は起つて行らして魚の汁をかけたお飯をお遣りなさいました。そして太郎に向つて

「太郎や、なぜお前は自分の勝手な事ばかりして居て云ふこと聞かないのです？ ジョンが可哀そうぢやありませんか、そんなに云ふことを聞かない、とお前とジョンと取り代へ子にしますよ」と仰しやいました。

太郎は又しても口の中で
太郎、ナニ、取り代へたつて構ふものか、犬になつた方が餘つ程、面白いや、ちつとも叱かられないで、そつだ一度犬になつて見ようか、
と云ひながら庭のお池の方へ行つてしまひまし

た。そうこうして居る中に夕焼の西の空も暗くなり、父様もお歸りになつたので下女がランプをつけてテーブルを出して晩御飯の仕度をして居ます。頓がて支度が出来たと見えて下女のお松の聲で「坊ちゃん、いらつしやい、お飯ですよ」と呼ぶ。すると向ふの玄關の方で

「ハイイ」と返事しながら驅けて行く子供が有ります。「オヤ、變だ。坊ちゃんはこの處に居るのにと見ると、是は又驚きました。其子供は自分の着て居る通りな飛白の着物と飛白の羽織を着て、自分と同じ足袋に、自分と同じ下駄を穿つて居ます。そして何うやら身体の大ききから、顔の様子迄も自分と同じ様に思はれました。そしてドン／＼か家へ上つて行きましたから、サア大變だと思つて一散に驅け出して行きましたが、其中に戸を締められたので入れません。家の中では皆が樂しそをに飯の最中で、先きの子供は何か面白さうにキヤツ／＼と笑つて居ります。太郎は入らうと思つ

て戸をガタ／＼動かしながら。

「母様、私です、ほんとの太郎です、開けて下さい」と云つた積りですが、自分の耳には何んにも聞えませんが、そして唯キャン／＼／＼／＼／＼／＼とばかり聞えます。

「オヤ私の聲は犬の様だ」と思ひながら着物を見ますと今迄の着物や羽織は何時の間にかジョンの白いむく／＼した毛皮に代つて居ます。之を見たら太郎は急に悲しくなつて。

「かわさまあー何うぞ勘恣して下さいあーい、もう是から云ふことよく聞きますから元の坊にして下さい、ワァー」と

大聲で鳴きながら、戸を開けやうと思つてがた／＼ゆすぶりました。するとお父さんの聲で

「太郎！お前は又ジョンを小屋に入れてやらないね」と云ふのが聞えました。

「あゝ忘れしました、けれど犬は寒くありませんよ」と云ひながら起つて来て戸を少し開けて呉

れましたから、太郎の犬は大急ぎで入らうと思ひますと、犬の太郎は足で以てぼんと蹴りました。そして

「畜生ッ！お前は家の中へ入るのぢやないッ！お庭の隅で寝て居るんだ」と云ひながら又一つぼんと蹴りました。太郎の犬は痛いので

キャンキャンと泣きながら、仕方がありませんからお庭の隅の木の草のかき集めてある中へもぐり込んで寝て見ましたが、何にしる夜寒の風がひゆ／＼と吹くので兎ても寝て居られません。夫れに學校から歸つて来たさきりでお飯もまだ食べないのですから、お腹はペコ／＼です。是には流石の強情の太郎も閉口して

「是は堪らない、犬と云ふものは可哀をいなものだ、お腹が飢つてお飯が食べたくても云ふことが出来ず。痛くても寒くても誰に知らせることも出来ず。あゝ私はも是で人間になることが出来ないのか知らん」と

ぶる〜寒さに戦栗ながら、シク〜と泣いて居ました。そして口には云へませんから泣きながら心の中で、

「お父様、お母様、何うぞ勘忍して下さい、是からジョンを大事にして遣りますから、何うぞ勘忍して下さい」

云ひ續けて泣いて居りますと何處ともなく一人の白い髯の生へた白い着物を着たお爺さんが出て来て、

「何うだ太郎！お前の願ひ通り犬になれて嬉れしだらう」と云ひますから太郎は「お爺さん何うぞ御願ひですから元の人間にして下さい。も一決して犬になりたいと云ひませんから、何うぞ人間に歸して下さい」と願ひましたが、お爺さんは首を振つて、

「イヤ〜そでなからう、お前は平素犬が羨ましいから犬をひどい目に合はすのだらう、お前の様なものは一生犬で居るのがよいのだ」と云

はれますので太郎はわあ〜と泣き出しました。此態を見たお爺さんは可哀そ〜に思つて

「そんなに悲しいのなら、元の人間にしてやるが併し是から必と能く云ふことを聞く子供になるか何うだと云はれました。

「エ、必と〜も是からおとなしい、すなはな子になりますから、何うぞ元の通りにして下さい」と云ひました。

そこでお爺さんは太郎を抱へてお家の方へ来て戸の隙間からお室に入つて寝て居る犬の太郎と取り代へて、何處かへ行つてしまつたと思ふと次の部屋から母様の聲

「太郎や、夜が明けたから、もを、起きなさいよ」と云ふのが聞えしました。

「ハイ〜と返事をして目を開いて部屋を見ますといつもの通り自分の部屋です、手足を見ると、もを犬の毛皮ではありません。太郎は嬉しくて〜たまらないので勢よく飛び起きました。そして顔

を洗ふと直にジョンの小屋に行つて見ますとジョンは居ません。それからお庭の隅の木の葉の掃き溜めてある所へ行つて見ましたら、ジョンは寒さうにふるへながら木の葉の中にもぐつて居ました。そして太郎の來たのを見て尾を振りながら出て來ました、太郎は其頭を撫でながら

「ジョンやもを是から仲よくしよね」と云つて臺所へ連れて行つて朝の御飯を遣りました。それから太郎は朝御飯の後で夕べの事を母様や父様にお話して

「母様！それだから僕はもを是から二度と犬にならない様に能く云ふことを聞きます」と申上げますと、初めから黙つて聞いて居らした母様は何ともお仰らずに太郎を抱いて其熱心にはてつた太郎の頬に接吻なさいました。が此時涙に輝いた母様の眼から熱い一雫が太郎の頬にかゝりました。

お父様は之を聞いて

「太郎はい、夢を見たな」とお仰しやいました。が

太郎は何うしても夢と思ひませんでした。是から太郎は大層親切なそしてよく云ふことをさくよい子になりました

めでたし~~~~~

子供の一言

或る日子供の持つて來た繪本を見ながら「ツラ、」の話をして先生も子供の時分に「ツラ、」を喰べて母さんに、こられたことがあると言つた。スルト
重雄「僕も喰べたことがある、炙いてお砂糖をつけてたべるとおいしいよ。」

三郎「重ちゃんおかしいな。ツラ、をやいたらとけてしまふたらうに。」